

平成29年度第2回清瀬市総合教育会議

平成29年度第2回清瀬市総合教育会議が平成30年1月19日午後1時30分に招集された。出席委員、議事の概要は次のとおり。

- | | | | | |
|---|---|---|------------------------|---|
| 1 | 日 | 時 | 平成30年1月19日（金）午後1時30分から | |
| 2 | 場 | 所 | 健康センター第2会議室 | |
| 3 | 出 | 席 | 者 | 渋谷 金太郎（清瀬市長）
坂田 篤（清瀬市教育委員会教育長）
宮川 保之（教育長職務代理者）
植松 紀子（教育委員）
兵頭 扶美枝（教育委員） |
| 4 | 事 | 務 | 局 | 石川 智裕（教育部長）
長井 満敏（教育部参事）
南澤 志公（企画課長）
粕谷 勝（教育総務課長）
福泉 宏介（統括指導主事） |
| 5 | 書 | 記 | 大津 雄平（教育総務課） | |

議事日程

1. 開会

2. 協議事項

(1) 21 世紀を生きる子供たちを育むために家庭・学校・地域・行政は何をすべきか

(2) その他

3. 閉会

開会

渋谷市長が開会を宣言

(渋谷市長)

教育総合計画マスタープランの柱の1つである「学力を保証し健やかな心と体を育てます」という目標に関連させて、具体的に取り組むべきことは何かについて議論したい。

まず始めに、社会を明るくする運動作文コンテストで表彰された清瀬第三小学校 5年生坂下さんの作文を紹介したい。

「テレビでは毎日のように国内や海外で起きたテロや事件のニュースが放送されています。私は怖いと思いながら見ています。私は犯罪に巻き込まれたことはありません。そのため、ニュースを怖いと見ていても犯罪について深く考えたことはありませんでした。しかし、あることをきっかけに犯罪はすごく身近にあるものだと感じたのです。

両親の携帯電話には、市からの不審者情報やオレオレ詐欺情報などの犯罪情報がメールで時々送られてきます。その情報も少し前に不審者情報の一つとして両親の携帯電話に入ってきました。後日、私と同じ小学校の下級生がすぐ近所で犯罪行為にあったということが分かりました。その時私は、犯罪とは近くにあるものだと初めて感じました。

そしてニュースを見て思うのは、起こっている犯罪にはお金目当てだったり、誰かに恨みを持ってやったりというより「誰でもよかったとか」「人を殺してみたかった」「いらいらしていた」などと、特定の人ではなく、たまたまそこにいた人を犯罪に巻き込んでいるケースが増えているということです。誰でも巻き込まれる可能性があるからこそ、不安や心配が大きくなっているのではないかと思います。

私は人の目があれば、犯罪やそれによって傷つく人は少なくなるのではないかと考えました。そう考えた1つ目の理由は、犯罪者は顔を見られて捕まりたくないという気持ちがあると思うからです。そのため、誰かが見ているところでは犯罪を行うことはしません。つまり近所の方が見守っていれば犯罪が起こりにくくなるというわけです。

そこで近所の方とのつながりを作るには、あいさつをするといいいのではないかと考えました。私が登校する時は、保護者の方が「おはよう。いってらっしゃい。」と声を掛けてくれます。毎朝信号の所に立ってくれている見守り隊の方も「おはよう。」とあいさつしてくれます。私も元気に「おはようございます。」と返すと顔を覚えていてくれます。また、保護者の方は、いつも通る子が見当たらないと気にして友達に聞いてくれます。このように、近所の方や見守り隊の方とあいさつを通して顔見知りになっておくと、犯罪者は

人の目があるので犯罪を起こしにくくなります。また、いざという時に近所の人気付いてくれるかもしれません。早く気付くことで、事態が進まないように阻止することができると思います。

人の目があれば犯罪が減ると考えた二つ目の理由は、誰かに温かく見守られていれば犯罪を起こす気持ちがなくなると思ったからです。お互いに人を思いやる気持ちは大切です。犯罪を起こしてしまった人の中には、他の人とのつながりが感じられず、居場所がなかったという人もいます。だからといって、他人を傷つけたり、その人の親や知合いを傷つけてはいけません。

ただ、居場所がないというのは、誰かがその人を思う気持ちがなかったということです。一人でもその人の立場になって話を聞いていれば違ったのではないのでしょうか。私は車に道を譲ってもらうという小さな思いやりもうれしいです。悩んでいる時や困っている時に思いやってもらうと、ここにいていいんだ、生きていていいんだという気持ちになって安心します。人を思いやるのは、時には自分が苦になることもありますが、その時には自分を思ってくれる人に相談できれば、つらい気持ちも晴れるでしょう。

一人一人が人を思って行動すれば、犯罪を起こす気持ちがなくなっていくと思います。このように人との関係を保っていけば、犯罪がこの世から減っていくと思います。ただの他人と思わず人とつながって過ごすことこそが大切だと思います。みんな生きるために生まれて、たった一つの大切な命を持っています。犯罪を減らし、最後には犯罪がなくなれば社会は明るくなります。お互いを認め合って大事に思うことが、社会を明るくする第一歩だと思います。そこから少しずつでも明るくしていく努力をすることが、私たちの使命だと思います。」

清瀬の教師の教育土壌が優れており、社会的状況も優れてきていることから、このような作文を書く子が現れてきていると思う。

それでは、「21 世紀を生きる子供たちを育むために家庭・学校・地域・行政は何をすべきか」を議題とし、子供の力、可能性をより一層伸ばしていくための考えや取り組みについて議論したい。

(坂田教育長)

坂下さんの作文、全ての子供たちを真摯に育てていくことによって、その子の伸びていく力が明らかになって、よりそれが伸びていく。今日の議論にもものすごく通じるところがある。

子供たちが社会の中核を担っていく 20 年後の社会はどのようなになっているか。人工知能が一層発達していく時代。仕事がなくなったり、新しい仕事生まれていく時代。そのような時代に子供たちが生きていくためにはどのような力を付けなければいけないか。その子が持っている得意なもの、また特に優れた能力を更に引き上げていくことが

必要。

興味、関心というものをベースにしながら、子供一人一人が自らの力を最大限発揮できるような教育を進めていかななくてはならない。このような力を育てていく必要である。

一人一人の子供のもっと知りたい、もっとできるようになりたいという思いに応え、興味、関心、得意分野を伸ばし、未来への夢や希望を育てるために清瀬市教育委員会は何をすべきなのか。

もっとできるようになりたい、しかしこの能力はさほど得意じゃないというような子供の実態を各委員から、ご経験上であれば伺いたい。

(植松委員)

ある自閉症の子の話。公立の小学校、中学校、高校へ通い、大学へも進んだ。気象について興味があったので、専門性を伸ばすために大学院へ進むこともできたが、一般企業に就職した。入った途端に営業に回され、すぐにつぶれてしまった。彼をもう少し大学の教授などが理解してくれて、そのまま研究室に置いてくれたら違うようになっていたかと思う。

どのような障害があっても、その子供のことをちゃんと認めて、そして支えて、大丈夫だよって言うってくれる人が必要だと感じる。

(兵頭委員)

みんなと同じでなければいけないという意識があまりにも社会にも学校にも家庭にもあるのではないかなという気がする。だから少しでも違っていると、そろえようというところにばかり意識がいきがち。でも本当はそういう見方ではない、本当にこの子の良さというものに目を向ければ希望もいっぱいあるわけで、そうすると先生たちもその子に関わることは非常に楽しいはず。そのように物の見方というか、意識が変わっていくことがまず必要なのかなと思う。

そのためには、いろいろな子供が自分の得意な分野を発揮させる場が必要であり、また自分の意見を言える、人と違って良いのだということを、みんな違って良いと言いながらもなかなか違うことが認めづらい周りの環境を変えていかなければならないと思う。

(渋谷市長)

お互いを認め合って大事に思うことが社会を明るくする第一歩だと、坂下さんの作文にも書いてある。

車椅子の方をバスの運転手さんが乗せている時間、いらいらしている若者の顔を見ることがある。しかし清瀬は一切そういう姿を見たことがない。清瀬の社会的土壌は非

常に良くなっている。

(宮川教育長職務代理者)

人としての在り方としての正直さとか、良心というものがやはりとても大事。その良心が現れていたのが坂下さんの作文なのではないかなと思った。そういうものが育つような環境にある。

IQ では測れない力を伸ばすような教育環境にしていく。そのためには家庭でもしっかり協力してもらう。ましてや自分の子供のためにどういう環境をつくらなくてはいいか。IQ で測れるもの、これももちろんやっているけれども、もっと一生懸命やらなくてはいいけないのは、IQ で測れない非認知的な能力をどうやって高めていくか。

(渋谷市長)

本当の夢や希望をかなえていくことで社会全体、周りの人たちを幸せにしていく。これが抜けているのは、いくら優秀になったって駄目。周りの人たちの喜びの役に立つ、こういうことをしっかり備える。

(坂田教育長)

社会のために自分の得意分野を活用していく、この意識が重要である。

(宮川教育長職務代理者)

この社会状況として学び直しを我々大人もしなくてはならないのかと考える。脳というのはどういうものなのか、教えたり手伝いしたりすることは脳が活性化する。しかし、最も大事なものは坂下さんの作文にあったような、良心というのはどうやって生まれるのかといったら、やはり人間というのは人との触れ合いがなかったら脳は萎縮していく。今はそういうことを求めている親が結構いるのではないか。

(坂田教育長)

自分のためではなく社会のために自分の得意分野をどうやって生かしていくのかという意識が根底に据えられた上で、やはりこれを伸ばしていける清瀬になるというこの方向性について何かご意見があれば。

(植松委員)

「5 歳で大体子供の人生が自分に合っているのか方向を示してくる。10 歳でかなり確立していく」と言われている。だから、5 歳で確立していくためには、その土壌になっていく安心の場がないと駄目。その安心できる場の最上は家族であり家庭であり、その次が教育の場であると思う。学校という教育の場も安心できる場でない限りは多分何

も学ばないし、人のためにということは全く考えない。そこにいてもらって安心できて、そして自分がいて人がいて、そして生かされているという感覚を持たない限りは、自分だけというふうになっていくと思う。

(兵頭委員)

子供の個性を伸ばしていくということがずっと言われてきている中で、本当に個性といっても基本的なところを本当に身に付けた上でしか開かないだろうと思う。また、社会に参画するような、そしてまた社会に貢献できるような子供にというのは、やはり人への信頼というものが、子供の生活の中で行われてきたそのやりとりの中で生まれるものであり、そしてまた自分も人や社会を大事にするという気持ちが生まれて、初めてその社会に対して返していきたいとなっていくのだと思う。

そうすると、自分自身を認めてもらってきた経験とか認めてもらえる環境をつくっていく必要がある。一人一人個性があるわけで、優秀な子供の中でも弱いところがあったり苦手な部分があったりする。それでもそういうところに決して引きずられるのではなく、より自分の良いところを出していける子供に育っていくっていう、基本的なところはやはり自分が大事にされてきたという、そういう人への愛情みたいなものが基本かなと思う。

(宮川教育長職務代理者)

興味、関心、得意分野を伸ばすというのは、学校でできることとできないことがあると思う。だから、今後は得意分野を伸ばすというのは、前回の総合教育会議でも話のあった子供大学、そのような中で得意分野を伸ばすなど、具体化していくと良いと思う。

(坂田教育長)

特に優れた能力をさらに伸ばしていく、この能力を社会のために使っていく、自分のためだけではないというようなところが大前提である。それとともに、この能力をさらに伸ばしていくためには、安心できる環境や認められる環境、人への信頼などのようなところがないとこれはできない。その前提で、このような教育を進めていくためには学校教育外で取り組むことも考えるべき。

義務教育はあまり得意ではない。それはどこがやってきたかというと、家庭がやってきた。習い事とか塾など。こういう文化が今、経済格差や家庭の教育格差が出てきている中で、子供の能力をさらに伸ばしていくことの格差と連動してしまう。

だから、家庭環境が非常に厳しい子供にはこういう環境を与えることができなくなってしまう。これで本当にいいのかとなったときに、学校だけではなかなか難しい。教育委員会と民間企業、NPO 法人等々が連携して、特に優れた能力を伸ばして興味、関心を一層高めるということを推進していく必要があるのではない。

清瀬の子供に対して、清瀬にしかできない教育を与えるというのは絶対必要だろうと

思う。清瀬の誇るべき教育資源を活用する。

具体的には、医療のまちというのが清瀬にはあるので、清瀬子供大学医学部薬科学部というものをつくる。その他にも、文化のまちを活かして、清瀬子供大学歴史文学部、科学のまちを活かして、清瀬子供大学科学工学部、農業のまちを活かして清瀬子供大学農学食物栄養学部をつくる。こういうものをつくって、子供たちが関心のある講座を選択し、希望者が土曜日や長期休業日に参加する。各分野の専門家、医者であったり歴史文学の専門家であったり気象衛星センターの人たちが講師になってこれを教えてくれる。

このように清瀬にしかできない教育を受けることで子供たちが清瀬を見直し、清瀬を誇りに思う。他自治体からも人を呼び込むことができるのではないかなと思う。

(兵頭委員)

子供たちがより様々な、より良い環境をつくっていくという意味でも、このような中で興味がある子供たちが参加していくのは非常に面白いし、清瀬の特色を生かしてそういう講座を考えるとというのはいいのかなと思う。

ただ、そこには人、費用が必要で、どこがきちんとした受け皿としてやっていくのかとか、計画がまだまだ必要だと思うが、こういった取り組みが清瀬の特色として魅力あるまちの一つの目玉になっていくと思う。

(宮川教育長職務代理者)

今グローバリゼーションとかグローバリズムといわれているが、自分が生まれ育ったルーツを知らない、自分のルーツを語れないでグローバルな人材になれるのか疑問に思う。とても良いプランだと思う。

(坂田教育長)

我々はこの子供大学というものを何とか具現化していきたいと思っているが、様々な知恵と要件が必要になってくる。これからしっかりと市長と話し合いを重ねさせていただきながら、一歩でも近づけていきたいと思う。

(宮川教育長職務代理者)

この構想をどうやって具現化するかということを一歩ずつやるべきだと思う。そうしなければ自治体の末路が見えてくる。それは、我々の人間社会も同様。その中で生きていくような社会づくりということをもっと明確にして提案していくべきであると思う。

(渋谷市長)

積極的に前に進んでいく、いろいろな課題にチャレンジしていく気持ちを失ったら

人間社会は終わりだということは当然である。

(坂田教育長)

清瀬子供大学はあくまでも希望する児童生徒を対象にした自発的な学びの場であって、学校教育の補完としての位置付けにしかすぎない。何よりも重要なことは、全ての子供たちが通う学校が彼らにとって楽しく伸びる場でなければならない。そして義務教育を修了した後であっても、自分の特に優れた能力を発見できたり、もしくは育てたり、伸ばすことができる力を育む場に学校がなっていないなければならないと思う。

得意分野は自分のためだけではない、喜びのためだけでもない、社会のためである。そのために自分の力を伸ばしていくという基本姿勢。それと、人への信頼感とかそれから安心できる環境というものがなければ自分の良いところを伸ばしていくことができないというのが大原則。そして、IQ では生み出せないような力を育む教育の場でなければならない。

最後に一言ずつ委員の皆さんからコメントを頂戴して、この会を閉じたいと思う。

(植松委員)

清瀬の教育は本当に優しい土地で、優しい人たちに支えられているなという感じはいつもしていて、一人一人を大切にしようということがすごく根底にあるからなんだと思う。より一層子供たちが豊かな人になっていくのではないかと感じた。

(兵頭委員)

学校が子供たちにとって楽しく伸びる場でなければいけないという、取りあえず今できることとしてはそこが一番押さえるべきところだと思う。一人一人の楽しい学校生活に向けて、教員がもっと子供の声に耳を傾けてほしいと思うし、いろいろな仕掛けをして楽しい授業、興味、関心を引き出すような授業をつくっていくということが根底にあり、そしてまた地域では、よりその地域の力を生かした学びの場ができていくといいなと思う。

そういう中では、例えば学校支援本部や社会教育コーディネーターのような組織ができて、整理されているといいと思う。

(宮川教育長職務代理者)

国のほうが中央教育審議会という場で教育のありようを検討しているが、それに任せて良いと思ってならない。だから、今足りない部分を本日議論できたし、それから冒頭市長からご紹介いただいた作文、特に良心というキーワードがその作文の中に非常に見えてきている。

子供大学を出ればそういうことを育て得る。補完的じゃなくて、刺激を与えたり、ある

いは先生方が自分たちの教育を変えていくような、そのようなものとしての位置付けと
いうのを考えていかなければならないと思った。

(坂田教育長)

われわれ教育委員会は今まで以上に子供大学をはじめとして果敢に挑戦をしてい
く。ぜひ市長からも応援願いたいと思う。

閉会

渋谷市長が閉会を宣言

午後 3 時 5 分 閉会